第一次長州征討にみる熊本藩の兵站

～民間人が担った兵站活動の事例～

内山幹生

目次

はじめに
一　第一次長州征討における熊本藩の出兵規模
　1　軍役規模
　2　備の実態
二　兵站の展開
　1　兵站配備
　2　民間人の登用
三　植木町茂平次の担った兵站
　1　物資の補給と調達
　2　補給路の開発
おわりに

はじめに

日本史上には、規模の大小を問わず数え切れないほどの戦争実態がみられ、数度にわたる対外戦争もある。数的には国内戦争が圧倒的に多い。群雄の割拠する時代の戦争は、その政治状況や経済的交錯による紛争勃発事例として、社会科学的アプローチを含めて多角的な分析がなされてきた。また、戦闘行動・作戦活動の分析に至っては、国内戦・対外戦を問わず、第二次大戦前の旧軍関係者および軍事専門家の詳細で厖大な研究実績が残されている。

こうした全体的研究態様にもかかわらず、手薄な研究分野がある。近代以前の「兵站」研究もその一分野とみてよいだろう。日本史全体の論考を見渡し、兵站をテー

マとした論考の量的な貧弱さを指摘しておく。このことは、日清・日露戦役の後頃より、「輜重輸卒が兵隊ならば、トンボ・チョウチョも鳥のうち」「輜重輸卒が兵隊ならば電信柱に花が咲く」など、兵隊間で揶揄されてきたことと無関係ではあるまい。兵站部隊そのものを戦場における非戦闘員として軽くみる悪弊があったからである。当時の輜重輸卒とは、輜重（軍需品）を輸送する非戦闘員の荷役軍夫を指し、彼らを指揮する輜重兵とは全く別の存在であった。

日本の国内戦闘の歴史から、ほぼ抜け落ちた「兵站」に関する視点を、折々の戦役における兵站活動を再現することで当時の交通や物流、戦時下の特殊な地域経済の一端を傍見できる。また、兵站行動に詳細な分析を加えることで、その戦役当時における戦術・戦略、用兵の思想的背景に迫ることも不可能ではないだろう。しかし、本論考の目的はここにあるのではない。

戦争の主体は、戦闘を行う軍隊以外にも存在する。陣営具や武器類・糧食・馬料など、戦闘資材や戦争を成立させるための諸物資を調達し、それらを給養・運搬するシステムが、何時の時代においても、国内外を問わず例外無く機能していた。すなわち兵站である。一九世紀の軍事理論家アンリ・ジョミニは、その著書『戦争概論』で、兵站を、軍隊を動かし補給する実際的方法と定義づけている。[二]

現代における兵站の解釈は、一般的に、戦闘部隊の後方にあって軍隊の戦闘力を維持し、継続的に作戦行動を可能とする機能や活動、組織の全般とされている。[三] 直接的な戦闘支援以外の活動であり、兵器・燃料・食料などを戦闘部隊へ届ける補給、兵器の整備と修理、将兵の医療や拠点の設営、補給線の確保、軍需物品の調達と保有・管理、役務の提供などがある。当然ながらそれらを管掌する会計部署も含む。日本古来の言葉では、狭義に、「小荷駄」が相当し（「大荷駄」も含まれる）、明治期の陸軍では、「站」を中継点と理解して、英語のｌｏｇｉｓｔｉｃｓを、「兵站補給」と訳した。

天草・島原一揆の後、幕末動乱期まで、幕藩体制下で二百年以上の平穏な時が流れた。その後に起った第一次長州征討に際し、幕府の下令した出兵規準は、慶安二年（一六四九）に福島国隆より幕府に上程された軍役令の改正試案、「慶安軍役令」によるといわれている。[三] 長州攻めの動員に応じた諸藩においても、戦時動員体制・軍制刷新を新規に研究した形跡はほとんどみられず、多くは先例にならうことで処置され、近世前期の北条流軍学書、『士鑑用法』などが比較的多く参考にされたようだ。[四]

兵站の規模や組織構造を解明しようとするとき、総決算を意味する確固とした具体的史料が残されていない場合、活用可能な史料を駆使し、全体の兵力規模を可能な限り復元することが前提となる。なぜなら、兵站規模は総兵力の規模に比例して自律的に変化するからである。両度にわたる長州征討の場合、幸いにも熊本藩の派遣兵力自体に関する公的な記録は少なくない。第二次征討では、第一次征討の教訓が活かされている。そのため本稿では、幕末動乱期の熊本藩における本格的実戦展開の端緒、すなわち第一次長州征討に焦点を絞り、従来顧みられることのなかった同藩における兵站活動に光をあてることにした。

注目すべきは、武士以外の階層から機略と胆力に富んだ人材を選び、兵站物資の調達と輸送、さらには兵站経路の開発に従事させ、諜報・探索にも当たらせた事例がみられることである。このことは、幕末から維新期にかけて、熊本藩軍編成近代化の流れの一端と捉えることもできるだろう。こうした観点から、主として『肥後藩國事史料』巻五と巻六の収載史料群、および熊本大学附属図書館寄託永青文庫における「覚帳」や「達帳」といった藩政文書を中心に検討を加えていく。

一　第一次長州征討における熊本藩の出兵規模

1　軍役規模

元治元年（一八六四）八月、第一次長州戦争における熊本藩の軍役規模は、慶安二年（一六四九）改訂の「御軍役人数割」によるもので、御役付として次のように定まっていた。

【史料1】[五]

① 公儀御役付

高拾万石ニ付　馬上　百七拾騎
　　鉄炮　三百五拾挺
　　弓　六拾張
　　鎗　百五拾本但持鎗共ニ
　　旗　貳拾本

石ノ當リニ而
高五拾四万石分　馬上　九百拾八騎
　　鉄炮　千八百九十挺
　　弓　三百廿四張
　　鎗　八百拾本
　　旗　百八本

②　覚

一脇近馬乗合九百七拾人

一外ニ馬乗ノ中小姓合四百八人

一家中ノ馬乗合五百五拾人

一脇近ノ足軽千七百人

一右之外家中ノ足軽千四百五拾人

巳上

（※本史料の包紙には、「子十番　光尚公御天守江上被置候御人数積等御書附」と記載されており、細川光尚時代の覚書である）

高一〇万石当り御役付の規矩を熊本藩の朱印高五四万石で換算すれば、①の「公儀御役付」にみえているように、馬上九一八騎、鉄炮一八九〇挺、弓三二四張、鎗八一〇本、旗が一〇八本となる。②の「覚」に計上されている人数は、①に規定された実質的戦闘要員の想定人数と思われるが明らかではない。馬乗と表記されている人数合計は一九二八人、足軽合計で三一五〇人となり、総兵力五〇七八人が算定される。その後の軍事編成の基礎となった数字であり、第一次～二次の長州征討に臨んでも、これらの規矩は生きていたとみるべきである。

御役付に規定されている編成内容を検討しておく。①「公儀御役付」による朱印高当りの規矩を熊本藩の実情に対照して組上げた兵力が、②の「覚」に記されている内容である。「脇近」とは、「家中」との対比より、陪臣および在御家人（一領一疋など）のことであろう。「中小姓」と「家中」は、言うまでもなく直臣である。「足軽」も家中の足軽と、それ以外の足軽（脇近の足軽）が表現されている。注意を要するのは、「公儀御役付」に記載された内容が戦闘要員にのみ限った規矩であること。つまり兵站に関する事々については、各藩において軍役を完全履行するため、恣意に委ねられていたことになる。

次に、①と②より具体的な戦力を把握しておく。①に規定されている「馬上九百拾八騎」に対して藩の想定した数字は、「脇近馬乗合九百七拾人」「外ニ馬乗ノ中小姓合四百八人」「家中ノ馬乗合五百五拾人」で、最大必要馬数は一九二八頭にも及ぶ。これらはもちろん机上の計数と思われ、たとえば馬乗りの中小姓四〇八人というものの、彼らが全て騎馬に拠ったとは考え難い。歩兵（足軽中心）の指揮官として徒士に編成された者も相当数あっただろう。家中士の馬乗りも同様である。ただし、脇近馬乗りの主体は在御家人と推測されることから、概数で九七〇騎の大半を占めていたとみてよい。

以上のことから、仮に、「馬乗の中小姓」の半数、「家中の馬乗」の半数が騎馬に拠ったとして、在御家人らの

八割ほどを騎馬人員とすれば、合計およそ一五〇〇騎弱となる。馬乗階層は上士と下士、換言すれば将校と下士官に相当し、主たる任務は本陣護衛のほか、突撃・突破戦力であった。彼らはすべて騎馬兵力であり、兵站物資を輸送する小荷駄隊に関わることはない。つまり、②の覚にみる総計五〇七八人の他に、数千人規模の兵站部隊が存在していたことになる。

元治元年（一八六四）一〇月、熊本藩は京都にあった征長総督（尾張藩主徳川慶勝）の補佐役、鳴瀬隼人正（尾張藩附家老）より書面で、軍団の目印たる旌旗・小印の図面ほかの事柄について回答をもとめられていた。本稿との関連から三項目を抽出し、対照してみる。

【史料2】(六)

一軍兵之惣数陪卒迄之人数者承知致度事

（回答）働人数凡一万人内外ニ茂可有御座候事

一御重役并隊々之長姓名承知度事

（回答）小倉援兵

一手　備頭　沼田勘解由

番頭　志水久馬助

寺尾九郎左衛門

田中八郎兵衛

惣人数　二千五百余

右之通八月十六日より出張仕居候

一手　家老　有吉将監

番頭　二人

一手　備頭　溝口蔵人

番頭　二人

一手　家老　長岡帯刀

一手　末家　細川豊前守

本陣　舎弟　長岡良之助

一門之内一手

一出張之道路并御國許より長防迄之里数承知致度事

（回答）熊本より小倉迄四十壹里半余、小倉より長州下関迄海上三里

熊本より小倉迄凡六・七日経到着之見込御座候事、

この史料によると、熊本藩では、小倉への派兵構想を、五手に本陣を加えた合計六手の一万人内外に定めていたことが分かる。ただし、五手のうち末家細川豊前守の一手は、支藩宇土方の兵力であり、「凡一万人内外」の数に計上されているのか不明である。熊本より小倉までの行程は四十一里半余と見積り、小倉より下関までを海上三里に見立てていた。

参考までに、『肥後藩國事史料』巻五より、第一次長州征討における熊本藩の出兵状況を表に整理しておく。なお、出征兵力（人数）については、「人馬差支」「宿所整い兼ね」などの理由による「追々進発」があり、史料にあらわれた全兵力が一隊となって出征したわけではない。[七] 兵站人馬の徴用が済み次第、また、中間・小者などを農村・町部より抱え込み次第、順次出発するので、最終的に表中の人数とは若干の齟齬があったと考えている。

〈表1〉

出兵順序	出征兵力（人）	各備初発出陣年月日
①沼田勘解由備	二二九三	元治元年　八月一六日
②溝口蔵人備	四四〇	〃　十一月一七日
③有吉将監備	五四三六	〃　十一月八日
④長岡良之助備	三七八五	〃　十一月十二日
		合計一万一九五四人

2　備の実態

備（そなえ）とは、中世後期から近世を通して戦時に編成された部隊で、足軽隊（鎗・鉄砲・弓）・騎馬隊・小荷駄隊などで構成され、独立した作戦行動をとれる軍隊の基本単位である。熊本藩の場合、第一次長州征討における一備は、定員およそ一七〇〇名に加えて、在御家人一〇〇人、その他を含めて約二〇〇〇人前後と想定されており、[八] 後世の近代的軍隊における三～四個大隊ほどの規模にあたる。小倉へは、公儀御役付により、四隊の備えが出陣した。その第一陣、沼田勘解由の率いる一番備の内容をみておこう。[九]

【史料3】

［北岡文庫輯録］

（警衛出兵人数　従元治元年至明治元年十二月　坂本彦衛調の内）

八月

一長防御裁許ニ就て小倉へ応接スヘキ旨命セラレタリ、因テ備頭沼田勘解由組共當月初旬ヨリ追々ニ出張、

沼田勘解由　備頭　四百三十五人　馬廻　内九十七人　大筒手

四人　番頭并番頭格　三百六拾九人　徒士　内五十六人　大筒手

（※志水久馬助・松山権兵衛ほか）　四百七十一人　足軽

物頭并物頭格　▼二百十八人　仲間

二十二人

（※小畠冨太・金森兵左衛門ほか）

▼百九拾六人　雑人
沼田勘解由家来
五十七人　陪士
八十五人　足軽
▼三十六人　仲間
▼百四拾弐人　雑人
番頭以下家来
六十四人陪士
三十七人足軽
▼二十人仲間
▼百三十六人雑人
惣合二千二百九十三人
※（▼印は筆者。兵站部署と推定。合計七四八人）

ここにみる「大筒手」の実態は、『肥後藩國事史料』の各巻に収載されている史料に表れていない。大筒、すなわち現在我々がイメージするような洋式大砲であれば、照準手・装填手・射手が最低限必要であり、他にも弾薬を補充する係や、射撃をコントロールする砲隊指揮所との連絡要員も要る。つまり、幕末期の砲戦展開には、一門あたり少なくとも四～五人の武士が直接的運用に関わっていた。これに加えて、弾薬や重い大砲を戦場まで牽引し搬送する軍夫があり、直接運用者に数倍する人数が必要となる。

馬廻四三五人と徒士合計三六九人のうち、大筒手は、それぞれ九七人と五六人で、計一五三人となっている。明治三年（一八七〇）廃藩置県の際、明治新政府が諸藩に保有武器調査を命じた折の熊本藩の大砲総数は一〇八門（うち旋条砲七二門）であった。これは、第二次長州征討以降の軍事近代化による結果であり、第一次出征時点における数量は、多く見積もっても、この調査時点の計数から半数以下に割り引いて見ておく必要があるだろう。

沼田備の出征においても、複数門の大砲が小倉へ牽引されていった。しかし、この史料にみる「大筒」の大半は、砲車に架設された大砲ではなく、「抱え大筒」、つまり砲手が抱え持つ大口径の火縄式種子島とみられる。重量二〇匁から一〇〇匁程度までの弾丸を発射するが、三匁半程度の弾丸を使用する小筒（小銃）と比較すれば、大筒の重量は数倍から一〇倍ほどにもなり、その取り扱いは格段に困難となる。そのため、大筒手自身が十分な肉体鍛練をすると同時に、移動の際、抱え大筒を担う屈強な武家奉公人（若党・中間・小者）を雇う必要があった。

史料中の、番頭・番頭格、物頭・物頭格、馬廻は、その備における上級から下級までの各級指揮官（将校）階

層である。馬廻は、馬上にあるか否か別として、基本的に馬乗りの将校階層であり、部隊最高指揮官の護衛と機動力を利した奇襲・突撃を主任務としている。全部を合計すると四三二騎となるが、他の幕軍兵力で充満しているはずの小倉へ駒を揃えて進駐することはなく、三分の一弱が大筒手に編成され、残り三分の二強が騎馬隊・銃隊（歩兵）とみられる。

馬は精鋭の騎馬兵力の他にも必要であった。洋式大砲を牽引する輓馬、各備の輜重部門と本陣備の駄馬も相当数にのぼる。これらは、武士の飼い馬ではなく、村方の農耕馬を徴用することで充足できた。馬の数は史料中に表れないので特定できないが、次に示す明治維新後の統計を参照すると、幕末期の熊本領内においても、夥しい数の農耕馬の存在をうかがわせる。

〈明治一二年（一八七九）調査〉『熊本縣概表』より[二二]

牝馬　七万七八八五　　牡馬　三万四二二二

合計一〇万八三〇七頭

〈明治一四年調査〉『明治前期熊本県農業統計』[二三]

牝馬　八万二七〇四　　牡馬　三万一七五二

合計一一万四四五六頭

二　兵站の展開

1　兵站配備

各々の備の中には兵站部門（小荷駄隊）が配置されている。現代用語では、「輜重」がそれに相当し、総大将の束ねる本陣備にはさらに大規模な小荷駄隊が置かれていた。第一次長州征討では、藩主の弟、細川良之助が本陣を受け持っている。大部隊が出陣すると、その消耗する物資は大量かつ多岐にわたり、食糧や馬料、衣料に草鞋などがあった。戦闘が開始されると、武器・弾薬・医療品の大量補給を必要とし、このことが、多くの夫方を必要とする所以でもある。小倉に第一陣として進駐した沼田備二二九三人の内訳は、軍夫（夫方）七四八人、残る一五四五人が歩兵を中心とした兵力であり、総勢の三割以上が兵站要員とみなされる。

小荷駄隊は、原則として備隊列の最後尾に組み込まれており、隊列に随従して動く。ただし、常に補給の用を生じることから、分派の一隊が小規模の護衛兵力を伴い、補給基地と戦場との間を活動することも珍しくない。さらに、戦闘の見込まれる地域へ、備の先がけとして物資調達担当の役人らが乗り込むこともある。部隊の死活を

左右する、誠に重要な部署であることから、小荷駄奉行には、古来より侍大将格の熟練の家臣を置いた。

沼田勘解由の備をみると、小荷駄奉行は備頭の次座にあり、番頭よりも上位の着座となっている。[一二] また、細川良之助の本陣備においては、小荷駄奉行附として一領一疋三〇名が付け置かれていた。[一四] これは、小荷駄隊が、荷車や駄馬に兵糧などを積載して移動する、機動性に欠けた戦闘力の脆弱な部隊であることによる。彼らは、小荷駄奉行の護衛と在郷より徴発された軍夫の監督を勤めていた。備における基本的な隊列編成の事例を、熊本藩でも参考にされた「行列備押」（『士鑑用法』）より整理しておく。[一五] なお、この場合は本陣備の事例であり、各手備の場合は、⑤の位置に備頭の一隊が据わることになる。

〈隊列順〉

①旗（足軽・足軽大将）
②長柄（足軽・長柄奉行）
③士大将（組頭・旗指・旗奉行）
④旗本組（足軽・長柄・総旗・外様之騎馬・筒・弓・鎗・使武者・近習騎馬・歩卒など）
⑤御大将（御団扇・御馬験・御大将・足軽長柄旗指・殿足軽・中間・小者ほか）
⑥後備（旗本）
⑦小荷駄

このように小荷駄隊は、進軍時、備本隊の最後尾にあって最も攻撃を受けやすい位置にあり、後退する際には、進撃の隊列がそのまま後退方向に転回するので、実質的に殿（しんがり）を構成する。「行列備押」にみる隊列は、戦闘隊形そのままであるが、細部は各藩によって異なると思われ、熊本藩でも実戦展開に臨み、多少独自の編成が採用されたとみられる。

次に、備に配置された兵站要員（役人）の実例を沼田勘解由の備にみておこう。[一六]

【史料4】

文久四年正月［御在國日記］八月十八日ノ條

一御備組且附属共惣人数昨日御奉行え及取遣置候處、大略之志らへニ而究粋之人数未夕相分兼候由ニ而差廻り来候人数付、左之通、

一壹人　御備頭　一百五拾人
炮術師役平士三人門弟共

▼一壹人　上着座小荷駄奉行　内
一壹人　無役着座　五拾人　士席
一弐人　御番頭　九拾七人　軽輩
一壹人　御鉄炮五拾挺頭組共　一壹人　御奉行
一弐人　右同三拾挺頭組共　一壹人

一四人　御奉行所士席根取
右同弐拾挺頭組共　一弐人　同所御物書
一弐人　右同拾挺頭組共　一八人
御奉行え被差添候御掃除頭支配
一壹人　右同五拾挺之副頭　一五人
御掃除方支配無苗之者
一弐人　右同三拾挺之副頭　一壹人　御目附
一四人　御番方組脇　一壹人
御目附付御横目
一壹人　御旗奉行　▼一壹人　御勘定頭
一八拾人程　御番方弐組　▼一壹人　勘定所根取
一壹人　御使番　▼一五人　御勘定所物書
▼一三人　御勝手方附所々御横目　▼一壹人
御具足支配役御鉄炮御弓支配役
▼一弐人　兵糧米等請払役　▼一壹人　御武器支配
▼一五人　金銀銭宰領　▼一拾七人
御天守方手傳役并御細工人共
▼一弐人　御医師　一九人
歩御小姓代共
▼一壹人　御馬医　一六人　御昇之者
一壹人　御儒官　一三拾人　一領一疋
一六人　歩御使番　▼一四人
天文師役門弟共
▼一壹人　陳場奉行御作事所目附　内
▼一七人　御作事所根取以下　三人　軽輩
一三拾人　陳場奉行差添地筒　以上
※合計四〇五人
※▼印は筆者（兵站部署と想定）

兵站部署と想定した役人を書き上げてみよう。まず小荷駄奉行一名がおり、御勝手方附横目が三名、米銀の出納役に兵糧米等請払役・金銀銭宰領の計七名がみえる。医師と馬医で計三名、陳（陣）場奉行御作事所目附と作事所根取で計八名、さらに勘定方系統には勘定頭以下物書まで七名がおり、具足や武器類、天守方の職人で合計一九名を数える。最後の天文師役門弟共四名は、塹壕掘りや壕舎設営、水路掘削などの築城部門で測量を担当した面々であろう。総計五九名が推定される。彼らの下に、多くの足軽や中間・小者、雑人と表記された徴用軍夫がいた。

兵站配備は、狭義には各備に限定されるが、広義の兵站を考える場合、兵站関連の指揮命令系統の中で、最上

級から最末端までを見ておく必要があるだろう。すなわち、熊本の本営と各備、さらにそこから最末端の調達現場までを含む範囲である。指揮命令系統から見渡すにしても、縦系統のみではなく、横の広がりや交差する部分を把握し、確認しておかなければならない。なぜなら、その縦と横のクロスする部分こそ、植木町茂平次のような町人や農民階層が、兵站の重要な構成者として活躍できる場であったからである。

2　民間人の登用

有史以来、戦争は、商業者の関わりなしに成立しえなかったであろう。古来より民間人の協力を得る必要があった。物資および物流の実権を握っていたのは商人であり、戦国時代の日本では、多くの商人が理財官として登用されている。広く知られている事例では、堺の薬種商小西隆佐があげられる。隆佐は、豊臣秀吉の家臣となり、河内・和泉両国における豊臣家蔵入地の代官に任命され、天正一五年（一五八七）の九州征伐では、兵糧補給を担当した。

隆佐の次男小西行長や美濃の油売りから成り上がった斎藤道三のように、大名まで出世した事例もみられる。戦国時代も文禄・慶長の役も、商人の協力なしに戦い抜くことはできなかったのである。彼らは、単に物資と物流の実権を握っていたのみではなく、大名に資金を供給する立場にあり、とくに近世大名の財政に関しては、商人の経済力なしに成立不可能であった。故に兵站とは、単に軍需品の調達・輸送といった物流に限らず、金融を含めて、戦争継続のためのあらゆる物理的背景を指すと理解すべきである。

日本の戦国時代では、敵地の作毛を刈り取って兵糧に充てることもあったが、一般的に戦闘時の食料は自弁であった。[1] しかし、近世の軍隊は、本稿の事例にみるように、不完全ながらも、その内部に兵站を担当する補給部隊を設け、分業体制の軍団に編成されていた。小荷駄の徴発に応じることは領民の義務として認識され、個々の村々より石高に応じて負担されている。ここにおいて、兵士は兵糧携帯の義務から解放されたのである。

戦場では、戦闘で生じる人的・物的損失の継続的な補填が要求され、前線に兵員と物資を補給し続ける必要がある。第一次長州征討における熊本藩の事例に見られるように、幕末には、軍隊の維持と運用に関わる基本的な活動が重視され、計画的・組織的な補給体制が構築されつつあった。現代的見方をすれば、広範なマーケティン

グの手法による作戦展開がなされてこそ、遂行可能な任務であり、これを実行できたのが商人階層である。

ところで、本稿で取り上げる植木町茂平次とは、いかなる人物であろうか。残念ながらよく分かっていない。彼は第一次長州征討当時、熊本藩の軍学者で鉄炮十挺頭小畠富太の指揮下にあって、主に軍糧の調達と兵站路の策定、さらに探索・諜報の任に当たっていた。しかし、明治維新後の去就は不明である。慶応三年（一八六七）七月、功績により、山本御郡代から御郡方へ士席浪人格の二代相続を稟議申請され、それを受理した御郡方役人を経て、次のような僉議が御郡方奉行衆に上申されている。

【史料5】[八]

其外探索ニ付而者深敵地へも忍渡、所々隠暦いたし逸稜御便利ニ相成候儀者別段之功績、商家之者ニ者奇特之心得方ニ付、右功業彼是被取束候而、此節士席浪人格二代相續被仰付候而者如何程ニ可有御座哉、

本件決裁については、「辰二月三日申渡済」と朱書されているところから、申請どおりに裁可されたと思われる。茂平次は植木町出身の米屋とみられ、熊本城下に同業の知己も多く、小倉城下周辺の米屋とも懇意であった。小倉八百屋町米屋伊兵衛父子、神田屋儀兵衛、柳井屋益蔵などの名が見え、彼らが小倉での協力者となっている。[九] この米屋同士のネットワークを活かすことで茂平次は縦横に活躍することになる。

一八三〇年代、プロイセンの元将軍、クラウゼヴィッツは、彼の代表的著作、『戦争論』で次のように述べる。[一〇]

軍隊が数日間も駐屯しなければならないような事態が起ってくると、他の手段によるあらかじめ準備されたものがなければ、たちまち軍中に大飢饉が生じてくるに違いない。この準備手段には二種類あって、大軍の場合には今日といえどもこれを欠くわけにはいかない。第一の準備手段とは即ち軍隊に付随する輜重隊のことであって、これに糧食として最低限必要なパンや小麦粉を数日分、つまり三～四日分だけ運搬させることである。そうすると、これに兵卒自身が携帯している三～四日分の糧食を加えて、少なくとも八日分の最低限必要糧食が常に確保されていることになる。

第二の準備手段は、編成の完全な兵站部を設けることである。これは軍隊の駐屯する度ごとに、遠近を問わず各方面より予備糧食を調達してくる任務をもち、軍隊をして、とっさの間に舎営給養法から他の給養法に切り替えることができるようにさせる役割を担っ

ているものである。

大量の糧食を扱える商人の存在は、近代以前の軍隊において、世界的常識として軍隊組織の維持装置にも等しかった。この視角より見ると、小倉における茂平次らの活動は、普遍的な軍隊の戦術的展開に即したもので、遠征軍における給養活動の典型であったといえる。

三　植木町茂平次の担った兵站

1　物資の補給と調達

植木町茂平次が、熊本藩の小倉出兵に際して、兵站の舞台に登場した契機は、軍糧の調達をめぐる事案からであった。地元正院手永との関連で、当時の惣庄屋江上安太と協力して植木町の継人馬や零落救済のことなどに奔走していた形跡が残っている。米商として、熊本城下でも多少目立った存在であったとみられ、小畠冨太に見出されたのである。小畠は、万延二年三月朔日現在の「御侍帳」（『慶順公御書出』）によると、御鉄炮十挺頭で二五〇石取の家中士であり、謙信流の軍学者でもあった。第二次長州征討における小畠と茂平次の協同は、元治元年（一八六四）八月より見えている。小畠の上申書に添えられた「袖控」より抜粋する。

【史料6】

…幸植木町茂平次と申者彼表ニ心當之米有之由ニ付、筋々之御内意仕手附役人内田祐右衛門を茂平次に差添、去八月七日より早打ニ而小倉表ニ差遣候、右両人途中ニ而米買入之手段いたし同十日於筑前黒崎・秋月御蔵米五千俵并薪壱万束、轉多（博多カ）廻之味噌五百挺買入之取組いたし置、同十一日小倉着仕私江安太初初発より之儀、委細之噺仕右之品々差寄之旨向御用達江申談呉候様相願候ニ付、時節柄至極最之働と感心同意いたし…

七月二八日、熊本藩は幕府より正式に小倉応援を命じられた。その直後、彼は八月七日、小畠の命令で小倉へ出立している。同月一〇日には黒崎に至り、秋月御蔵米五〇〇〇俵と薪一万束、味噌五〇〇樽の調達に取りかかり、ほどなく成約にこぎつけていた。この事案は、小倉へ参集する諸藩の軍隊が大規模にのぼるとの予測から、小倉領内の「諸品差支にも相成可」として、小倉藩の対面を傷つけるのではないかとの憂慮もあって、一旦白紙に戻された。しかし茂平次は、

…たとひ小倉様之御手当者十分ニ候共、ケ様切迫之折柄、他藩之御備迄ニ被図候御訳茂有御座間敷、於国者

別段之御備ニ茂可相成候ニ付、最初之米・薪等品々取堅候様被仰越候ニ付前条取組之品々直ニ取堅可申と咄合申候得共、根元米千俵丈之儀者寸志ニ茂差上可申覚悟ニ御座候処…

といい、米千俵だけは自ら買い上げ、寸志に差し上げることにした。このことが、図らずも、茂平次の米商人としての力量を示す結果となる。

茂平次の活動は兵糧米の調達に限られたことではない。当時の卸売米の流通は、周知のごとく玄米の状態である。精白した米は傷みやすく、長い時間が経過すると黴が付いたり、食味が落ちたりして商品価値を失う。そのため町や村には、米の精白を生業とする搗き米屋が少なからず存在した。熊本藩の本営は、小倉城の東方一里弱、廣寿山の山麓に位置している。付近には多くの将兵が宿陣し、毎日大量の白米が必要であった。

小倉城下には小倉藩兵が臨戦体制で滞陣しているほか、熊本藩兵のように諸藩からの援兵も数多い。需要に対して搗き米屋の能力に限界があることから、熊本藩では、自前で精白することにした。茂平次は藩命を受け、小倉の郊外、宮ノ尾河原において池部啓太の測量協力を得ながら、数十日の作事期間を要し、二輪の水車を備えた精米所を完成させている。史料によると、作事期間を通じて現場に詰めた様子がうかがえるが、その間も別の任務に従事していた。廣寿山陣営の作事と、同所で使用する日用品の調達一件を紹介しておく。[二四]

熊本藩より来援した将兵は、小倉城下の寺院等へ分宿していた。有吉将監、溝口蔵人の両備も出陣を命じられ、追々藩主（弟の良之助が名代）も出馬の手はずである。有吉備は、九月四日に熊本を出立しており、四～五日のうちには小倉へ来着する。小倉へ先着していた作事方役人一同、大いに当惑しながらも作事資材の手配にとりかかったが、馴れないこともあって、急々には対処できない。そうした折、茂平次の活動が眼にとまり、小畠富太の内諾を得た後、正式に作事頭高橋治部右衛門に陣営火急の用として呼び出されたのである。

茂平次の行動は早かった。兼ねて見込みを付けていた、小倉八百屋町の米屋伊兵衛父子、神田屋儀兵衛、柳井屋益蔵らへ計り、相応の混雑はあったものの、陣営入用の品々を翌日中にはほとんど集めてしまった。内訳は、畳表一二〇〇枚余、藁筵六〇〇〇枚余、板三〇〇坪、縄一〇〇〇把余、ほかに畳刺し職人、炭や油、火鉢・土瓶・桶を始めとする日用品などである。その他にも、細々とした物資があったものと思われる。次に、藩政史料に現れていないが、作戦展開を文字通り足元で支える物資の

調達にふれおく。

第一次長州征討における熊本藩の実戦展開は、ほとんどなかったに等しい。正確には、軍隊の移動という作戦展開はあったが、砲火を交えることはなかったというべきである。小倉へ出陣した際、村々からの夫方（軍夫）動員や軍需物資調達のくわしい状況は、領内各手永に調達が下令されたにもかかわらず[二九]、小数を除いて藩政史料にも地方史料にも見い出し難い[三〇]。関係する史料自体は少なくないと思われるが、研究対象として着眼されていなかったことも大きく災いしている。熊本藩を含む九州諸藩において、地方に要請された夫方や物資は、ほとんど似通っている。共通するものを小倉藩の第二次長州征討を事例に、慶応二年（一八六六）『豊前国仲津郡国作手永大庄屋御用日記』[三一]より抽出しておこう。まず馬料である。【史料七】

三月十日

御馬飼干草御買入之義、先日申達候処、貯置無之段御断申出候得共、又々此節御沙汰ニ者去々子年干草御用意郡々へ夥敷被仰渡、其後御用無之、其侭差置候へハ捨りニ相成候ニ付、郡々御問欠ケ不相成程貯置、残り其所ニ而相用候様ニとの御趣意ニ付、此節迚も一向無之との申上訳難出来趣、此砌者御目付様方御馬数多彼是干草御差支ニ付、郡々ニ而如何様共致し、是程位者取合差出候様ニとの義者被申談宜被取計候、則企救郡を除、残五郡割合左之通ニ候、以上、

三月九日　　和田藤左衛門

仲津郡大庄屋中

御用干草三千貫目　　五郡割り

内

千拾六貫目　　田川

五百六拾八貫目　　京（京都）

六百六拾七〆目　　仲（仲津）

四百三拾三〆目　　築（築上）

三百拾六〆目　　上（上毛）

右小倉御厩迄付出し可申候、尤切方・船賃水上ケ共、代積り書付添差出候へハ、代札御払ニ相成候事、

但、品物都合出来之上ハ、代札積り書付者前以為差出申度事、

田川郡・京都郡など五郡に、合計三〇〇〇貫目の干草を小倉御厩まで配送するように命じている。小倉藩では、第二次征討に備えて馬料の備蓄を開始し、田川・京都・中津・築上・上毛の五郡に対し、干草三〇〇〇貫目の用意を命じた。相当の分量が必要であったとみえ、その後も数次にわたり同様の動きがみられる。ただし、馬料に

ついては、古今東西の軍隊において、兵士の糧食給与ほどの細やかな運用システムを必要としなかった。クラウゼヴィッツは、『戦争論』上巻で、[八]その理由を二つ挙げている。第一は、

馬料の件になると、これは今までまったく精巧な給与システムがとられたためしがないといっていいだろう。というのは、馬料の容積はまことに大きいものであって、運搬が極めて困難だからである。大体一日分の馬料の重量は、一日分の糧食の一〇倍に相当する。しかるに馬匹の数は、一軍中の兵員数の約一〇分の一以内にとどまることなく、今日では四分の一から三分の一にまで達していた。

これは両度の長州征討から五〇年ほど前のヨーロッパの状況であり、世界の軍隊における馬数増加の趨勢とその人馬比率を端的に示している。クラウゼヴィッツの指摘する、馬匹の数が、「今日では（兵員数の）四分の一から三分の一にまで達していた」とする部分は、第一次長州征討当時の熊本藩遠征軍にも適用できる。馬匹の増加と馬料の容積が巨大であるところから、馬料は、移動の途中もしくは戦場の周辺地域で調達された。そして第二の理由を次のようにいう。

さらに馬料にいたってはその調達が一層容易である。というのは、この馬料というものは食糧のように製粉したり、それを焼いたりする手間がかからない上に、その地方の馬のために次の収穫期までの飼料が貯えられているのが普通だからである。それ故、たとえ厩舎飼料は少なくても、そのために一時的な軍の馬料には事欠かないものである。ただし、この馬料調達は市町村当局を経由してなされるべきであって、決して直接民衆から収奪してはならない。

兵士の糧食と比較して、ほとんど加工する必要のない馬料については、豊前小倉をはじめとする周辺各地が、四通八達した豊かな供給源であった。熊本藩における馬料調達の事情も、ほぼ同様と類推することができる。将兵の糧食調達には精巧な給与システムの構築が要求されるが、馬料については、幕府軍役の規矩として、仮に熊本三備の騎馬兵力を概略一五〇〇騎と推測したが、一備五〇〇騎程度となり、小倉・熊本間五～六日行程のところ、遠征途次の村々で十分に事足りると見通し得る。

馬料や糧食などのほか、日常の必要不可欠な物資に草鞋がある。通常の使用状態では、三～四里歩行程度の耐久性があるとされるが、[九]戦場の兵士が履く場合は別である。行軍と激しい戦闘下では、一日で消耗してしまう場合もあるだろう。熊本から各備が出征する際は、兵士各

自が腰に下げるなどして持参するほか、植木町で隊列を整える合間を利用し、兼ねて用意の分を大量に調達していた。[30] 小倉に到着した後、熊本より持参した草鞋が尽きた場合の補充は、どのように対応したのであろうか。

草鞋は、非軍事の状況下においても日常的な消耗品である。その材料は稲藁であることから、稲作地帯ならばいかなる場所でも調達容易であり、同盟軍たる小倉藩内で調達することに何の障害もなかった。次の史料は、小倉領内で大量の軍用草鞋が作られていたことを示している。[31]

【史料8】

五月廿二日小雨

御軍用草鞋、御郡中穢多共役日ニ而、納方之儀、昨日割書付を以申遣候所、高割ニ而者不同ニ相成候付、一昨年之通、穢多竈割左之通御手当被下度存候、右御断旁如斯御座候、以上、

五月廿一日

一弐万七千五百四拾足	企救郡
一四万五千九百八拾三足	田川郡
一八千六百九拾壱足	京都郡
一壱万千六百七拾弐足	仲津郡
一四千弐百九拾五足	築城郡
一千八百拾九足	上毛郡

右之通り

合計一〇万足で、これらは全て小倉藩御用の軍用草鞋である。文中「一昨年之通」と文言があり、元治元年（一八六四）第一次長州征討の際にも同様の命令が出されていたことがわかる。この事実から、小倉領内では、熊本藩を始めとする幕軍勢力からの万足単位の需要に、比較的簡単に応じられる体制が出来上がっていたとみられる。

2　補給路の開発

第一次長州征討における熊本藩の小倉派遣軍は、熊本城下を出発して植木町へ向かう。植木より山鹿、南関を経由し、久留米領の筑後府中へ至り、さらに松崎から長崎街道に入って山家・内野・飯塚・木屋瀬・黒崎の各宿からなる筑前六宿を経て小倉に至った。これは、門司大里より船出する際の江戸参勤の経路と重なる。南関を出て柳河領・久留米領を通過し、松崎を少し離れたところで福岡領に入る。表向き、軍勢の通行にはさしたる支障もなかったが、兵站物資の通行には少なからぬ困難があった。

当時の福岡藩では、分裂する藩論もあって、熊本勢の自領通過に対して苦慮の様子が見える。熊本では福岡領

内の人馬継立について、「…筑前路駅之継人馬立御断有而者夥敷御薪物運送之儀、惣而通人足を茂可被為仕御達之処」と判断し、熊本―小倉間を、「通し人足」による運送を考慮していた。協調を指導する幕府の意向に反して、熊本藩とは意志の阻隔がみられる。これは、この時期の福岡藩における筑前勤王党の跋扈する事情と関係があった。そのため、熊本藩では、兵站の局面打開を地域末端の行政官たる惣庄屋および茂平次ら、町人階層に託したのである。

ちなみに、派兵第一陣となった沼田勘解由の部隊は、元治元年（一八六四）十二月には役目を終えて帰国の途につく。その際、沼田と指揮下の一部は、蒸気船に砲器類その他を積み込み、九州西海岸廻りで帰国した。残りの兵力は、福岡領内通行を最短距離とし、小倉より秋月街道を通り、呼野、大隈、松崎、瀬高、山鹿に夫々一泊し、計五泊の行程で熊本に着している。この帰国交通路線の変更は重要である。筑前勤王党の存在から、福岡藩との連携が十分ではないとすれば、可能性は小さいながらも、以後、同藩との確執も想定しておかなければならない。小倉の熊本藩軍駐屯地へ糧食・補充用品を供給する路線の一つ、すなわち、福岡領内通行部分の短い秋月街道は、万一の場合に、軍団の退路として利用できる路線であった。

部隊付の小荷駄隊（兵站部隊）は、備の一隊として同行する。ただし、軍需品の全てを一度に運ぶわけではないので先発部隊もあれば後発部隊もあり、状況に応じ、熊本と小倉の間に小荷駄隊が往復することになる。その際、備の一隊で行動すると安全を保たれるが、独立した小荷駄隊として活動する場合、護衛の兵が必要である。さらには、商人が、彼らの調達した物資を、直接小倉へ配送する場合も少なくない。その際は、通行の安全と迅速性、運賃の極小化を考慮しなければならなかった。

植木町茂平次らの開発した兵站経路を史料により再現してみよう。備に附属された小荷駄隊とは別の、茂平次らの主導に成る一隊は、小船を集めて坪井川を下り熊本城下を出る。小島河口（坪井河口）に至ると、百貫石で貨物を中型船に積み替え、有明海を海岸沿いに北上した。長洲地先を過ぎて柳河領沖合を抜け、筑後川河口より遡上して内陸を目指し、久留米へ向かう。久留米城下に入ると、府中瀬の下町で積載した物資を揚陸し、人馬・荷車に拠って、筑後松崎を経て十二里余の行程を筑前飯塚へ至る。

飯塚宿より川舟に積み替えて遠賀川を下り、途中で直方、中間の穀倉地帯を通り、水巻より陸路をとって二里

半ほどで洞海湾に抜け、黒崎より廻船を利用し若松・戸畑経由で小倉に入ることができた。遠賀川ルートでは、空舟を傭船したとしても、途中数カ所の要衝で物資を調達することが可能であり、それが茂平次らの商業的な活動趣旨でもある。洞海湾は、若松・戸畑間（現若戸大橋）に湾口があり、福岡藩によって砲台が築かれ、湾内の安寧は保たれていた。

飯塚宿から北へ流れる遠賀川の水運を利用する発想は特筆すべきである。活動範囲の狭い武士階級（藩庁役人）では、到底着想できるものではない。総計一万人以上の軍隊に加え、数千人に達する軍夫の糧食など、小倉で必要とされる軍需品は尨大な量にのぼる。茂平次は、それらを遠賀川の舟運ルートに載せることによって、短期間にも関わらず、通し人夫に対する賃銭等で、延べ三二〇〇両ほどの経費縮減に成功した。[二八] 茂平次の物流に長けた商人としての能力が、遺憾なく発揮された事例である。

補給における戦略的機動性は、河川によって制約を受けるとともに、著しく利益を得られる場合もある。河川による補給線の切断もあれば、その流れを利用し、労せずして大量の貨物を目的地へ輸送できることもあるという意味である。河川で運べるような物資は、それが大量であったとしても、陸上を人馬や荷車によって運ぶより、はるかに簡単であった。茂平次は川舟による運搬能力を熟知しており、軍夫一四〇〇人で陸上を搬送するよりも、数隻の川舟を傭船するほうを選択したのである。

元治元年十一月中旬、細川良之助の本陣備は、その軍需物資九四〇箇余、重量にして四万九四五〇斤余の輸送を茂平次に託している。[二九] 当初、熊本藩では、福岡藩の人馬継立システムを利用して物資輸送を行う予定であった。しかし、福岡藩の内部事情により、全面協力が困難とみて、熊本から小倉まで通しの人夫を利用して取り組むように計画を変更していた。その場合、運賃が過大になるため、植木町茂平次らに新補給ルートの開発を命じたのである。

備の小荷駄隊では、馬の背による担送と、車輌（荷車）による運送を併用していた。茂平次らも、久留米瀬の下町から筑前飯塚宿まで陸送すると決めた後、車輌製造の建言をしている。藩庁の協力もあって、茂平次は、出来合いの荷車を調達することなく、新たに車輌を製作することから手がけることにした。今後は、車力運送が商売になると見越したからにほかならず、藩庁では、建言を受けて鶴崎より大工を呼び寄せ、正院手永惣庄屋江上安太へ製造を命じ、数十輌を完成させた。

茂平次らによる新しい兵站補給路の開発は、官民一体

となって協力した所産である。補給路の開発については、その安全性と補給路に連なる補給支線たる交通網、さらに物品を供給する補給源たる後背地域との連携が重要であった。事の成否に直接関わることでもあり、こうした物流の実態や背景を、商人の眼で十分に探索し、吟味しておかなければならない。この動きの延長線上に、小畠冨太が茂平次らに託した戦闘予定地域（下関清末町ほか）、後方地域（秋月・黒崎・若松・長崎）における諜報・探索活動があり、物資の動きとともに部隊の移動や集結状況を注視していたものとみられる。[一八一]

おわりに

兵站任務の円滑な遂行を担保するには、作戦地域と兵站基地との間の交通が確保されていなければならない。確保された交通線が兵站線・補給線であり、兵站線の確保と警備が軍事的展開の要となる。兵站の主要任務は補給であるところから、貨物ごとの内容や位置、つまり兵站情報の管理と蓄積の問題が生じる。勘定方を中心とする諸間役人らの活動が中心となるが、食料や衣服、陣営具ほか建築資材の調達と保管・分配・役務の提供など、物流効率の面からみると、手慣れた民間人、則ち、活動的な商人の登用を考慮せざるを得ない。彼の職分として、これらの実務処理に当たっては、調査活動（探索）との表裏一体が求められる。

兵站に関わる探索対象は、重層的で複雑である。各戦闘地域に向けた各補給線ごとの運搬能力と運搬計画の最適化、供給計画と需要計画、物流計画、さらに兵站線に対する攻撃に対処するための情報収集、地形や地図情報、周辺領域や住民、ゲリラ活動の有無など広範な対象があった。つまり兵站は、戦闘継続中において最重要の機密事項であり、詳しい様相をまとめた記録が少ない一因にもなっている。

熊本藩の偵吏は、京都・大坂・長崎など諸方で活動していたことが判明している。[一八二] しかし武士の探索活動には、武士に固有の分野があり、加えて、武士であることに起因する制約があった。彼らにとって、日常的な商業活動・経済活動を商人並みに理解し、なおかつ自然に集まる情報を収集・蓄積することは容易ではない。武士並みの胆力を見込まれた植木町の商人、茂平次の活躍する余地も、実はこの点にあったのである。

筆者は、日本における近世末期の一般的な兵站事情を、およそ戦国末期の兵站と同じ程度の実行レベルであったとみている。その理由は、第一に、元和偃武後の二百数十

年にわたる政治的安定があり、幕藩諸国家間にも戦争状態が現出しなかったことである。このことは、時代が下るに従い、軍事的緊張感を薄れさせる方向に作用した。第二には、兵学研究自体が、武士道や士道などの倫理的側面を重視するようになったことを挙げたい。これらによって、兵站を含む部隊運用（陣法）や編成の研究が停滞してしまった。

しかし、嘉永六年（一八五三）、ペリーの率いる米国艦隊浦賀来航以降は、危機意識の昂揚から、フランス・オランダなどの軍事諸学導入による洋式兵制に目覚め、幕府および諸藩で軍事近代化の兆しがみられるようになる。たとえば、幕府陸軍において、歩兵・騎兵・砲兵に三区分する三兵戦術の本格的導入などがあげられる。[四〇] この時期の洋式軍隊については、その部隊運用に関して、バックグラウンドたる近代的兵站の運用が不可欠であった。現在、このことを証明する決定的史料を持ち得ないが、第二次長州征討より戊辰戦争に至る間には、ほぼ近代的兵站構造が形成されていったとみるべきである。なぜなら、戊辰戦争における西国諸藩を主体とした新政府軍による東北遠征の成功が、そのことを実証している。

【註】

（一）佐藤徳太郎訳A・ジョミニ『戦争概論』（中公文庫二〇〇一）。

ジョミニは、戦場へ移動し、運動する戦闘が主体となる時代へ移行すると、兵站の重要性が高度化して宿営や行軍を体系化せざるをえないと述べる。軍隊の行動に必要な集結・行軍・輸送・補給・宿営・情報活動・予備につき、その重要性を説いた。

（二）江畑謙介『軍事とロジスティクス』（日経BP社二〇〇八）。

（三）高橋典幸・山田邦明・保谷徹・一ノ瀬俊也『日本軍事史』二〇〇六（吉川弘文館二七三～四頁）。

「…諸藩の出兵基準は、「慶安軍役令」とされたが、鉄砲数の増強など、軍事改革に応じた指示が出されている」

（四）熊本大学附属図書館寄託永青文庫に、正保三年（一六四六）北条氏長「士鑑用法抄」「士鑑用法図解」等がみられ、北条流軍学は熊本藩兵法六家の中心的位置にあった。

（五）「公儀御役付・覚」（熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵）。

（六）「元治元年長征記録」（改訂『肥後藩國事史料』巻五　三三九～四一頁）。

（七）各備の出発については、改訂『肥後藩國事史料』巻五、所収史料によると、
①沼田備「八月初旬より追々進発」（二〇七頁）
②溝口備「十一月十三日出発のところ追々進発」「人馬差支」（四六一頁）
③有吉備「十一月八日発、十一月十日番頭以下、十一日物頭等」（四四一頁）
④長岡備（本陣備）「十一月十二日」（四六一頁）
などの記述がある。さらに、「討入延期ノ模様」などの理由もあるところから、撤退命令が発令された時点で編成未了の部隊は、解散を余儀なくされたとみられる。
（八）「京・大坂・鶴崎・長崎・小倉仕懸御用状扣」（改訂『肥後藩國事史料』巻五　二〇五頁）。
（九）「北岡文庫輯録」（警衛出兵人数従元治元年至明治元年十二月坂本彦衛調の内）（改訂『肥後藩國事史料』巻五　二〇七頁）。
（一〇）南坊平造「明治維新全国諸藩の鉄砲戦力」（『軍事史学』通巻49号13巻1号　一九七七）。
（一一）熊本縣蔵版『熊本縣概表』（熊本県一八八〇）。
（一二）熊本女子大学郷土文化研究所『明治前期熊本県農業統計』（日本談義社一九五四）。
（一三）文久四年正月「御在國日記」（改訂『肥後藩國事史料』巻五　二〇五頁）。
（一四）同（同　四三三頁）。
（一五）北条氏長「士鑑用法圖解」（永青文庫寄託熊本大学附属図書館蔵）。
（一六）文久四年正月「御在國日記」八月十八日ノ條（改訂『肥後藩國事史料』巻五　二〇五頁）。
（一七）中村通夫・湯沢幸吉郎校訂『雑兵物語おあむ物語』（岩波文庫一九四三）。
戦場に着くまで、短期戦の場合は口弁であったが、長期戦になると兵糧が支給された。一日分の糧食は、水一升、米六合、塩一勺、味噌二勺とある。
（一八）「覚」（「覚帳」文七―三―十一熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵）。
（一九）同
（二〇）清水多吉訳カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』上巻（現代思潮社　一九六六　四四二頁）。
（二一）「覚」（「覚帳」文七―三―十一（熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵）。
（二二）万延二年三月朔日「御侍帳」（「慶順公御書出」）（松本寿三郎編『肥後細川家侍帳1』一九七七）。
（二三）「袖控」（「町在」一〇―三―一・永青文庫寄託熊

本大学附属図書館蔵)。

(二四)「覚」(「覚帳」文七—三—十一 (熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。

此節御応援御出張之儀者御府中寺院等へ御詰込相除申候処、引續将監様・蔵人様御備茂御出張被仰付、追々上ニ茂御出馬可被為遊哉之旨、九月二日御到来御座候由之處、既ニ将監様御備者同月四日比御發途之由にて於廣寿山御陣営御作事被仰付、幾四・五日之御日畧ニ相成、御作事方も御當惑之由ニ而諸品手配等村上方江被仰付候得共、急埒付兼、重畳御當惑之由及承申候ニ付、右様之儀者茂平次兼而手馴居申候ニ付、此者江被仰付候ハバ埒茂可仕哉之趣小畠先生江茂追々内意申達候処、御作事頭高橋治部右衛門殿より茂平次御呼出ニ相成前条御陣営御火急之趣被仰聞何連之道よりニ而も迅速之取計を以、諸品御間ニ合候様取計可申…

(二五)「町在」一〇—三—一 (熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。

一於御国許連人并諸荷物運送夫遣イ等大造之繁雑、御国中御惣庄屋千葉城江数十日昼夜ニ懸相詰手数仕候由…

(二六) 福岡市総合図書館収蔵「廻江手永会所甲斐文書」には、「小倉出陣人足の件」「弐番手人数差出の件」「小倉御手当の件」「小倉出張水夫の件」「小倉出陣人馬賃銭の件」ほか数点がある。

(二七) 福岡県文化会館図書部編『慶応二年丙寅豊前国仲津郡国作手永大庄屋御用日記』(一九七八 福岡県地方史研究連絡協議会 五十一頁)。

(二八) 清水多吉訳 カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』上巻 (現代思潮社 一九六六 四三八頁)。

(二九) 平亭銀鶏『江の島まうで浜のさゞなみ』(『神奈川県郷土資料集』7 紀行編 一九七二 所収)。

(三〇)「覚」(「覚帳」文七—三—十一・熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。

(三一) 福岡県文化会館図書部編『慶応二年丙寅豊前国仲津郡国作手永大庄屋御用日記』(一九七八 福岡県地方史研究連絡協議会 一〇〇頁)。

(三二)「覚」(「覚帳」文七—三—十一・熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。

(三三)「良之助様豊前小倉表御出張一途」(改訂『肥後藩國事史料』巻五 五七七頁)。

(三四)「小倉一件」(改訂『肥後藩國事史料』巻五 六一九頁)。

(三五) 小畠冨太「袖控」より抜粋(「町在」一〇—三—一・(熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。

一於御国許連人并諸荷物運送夫遣イ等大造之繁雑、御国中御惣庄屋千葉城江数十日昼夜ニ懸相詰手数仕候由之処、安太儀者出張御人数植木御茶屋ニ而着到を初、日々之休泊且人馬継立等迄一身ニ引受ケ昼夜無間断千葉城并植木ニ懸ケ、去八月以来徹夜寒気之無厭精勤仕候由ニ而、何連之途より茂御軍備筋御為合を計り且又下方人馬疲弊相減候様工夫を凝し稜々建白之内筑前路御隣領初人馬継立御断ニ付而者出張之荷物一切通夫運送可被仰付哉之御模様ニ依而者御惣庄屋中何レ茂当惑ニ付、大低（抵カ）小倉路茂平次者車力運送弁利ニ茂可相成御僉儀ニ付鶴崎表より大工御呼寄安太引受ニ而製造被仰付候由ニ而、始末手附役人大工江差添差図行届、数十輌之車出来仕候由、時ニ取而者一稜之御用便ニ相成可申候事、

一右運送当惑ニ付而安太・初右衛門・茂平次呼出段々研究いたし御国坪井川口より諸荷物積出、筑後川江遡ニ而久留米瀬ノ下町ニ而水上ケいたし同所より十二里余陸地人馬運送筑前飯塚町より尚川舟下りニ而黒崎・芦屋・若松ト積廻候ハ、御弁利ニ可相成ト運賃等積り立候処在夫莫大ニ相減候上御出方筋餘計ニ相減可申積合候由ニ而其趣積書を以伺出候処、去十一月為御試茂平次引請被仰付積廻し筑前路人馬継立ニ至候而ハ種々難渋之儀茂為有之由ニ候得共、茂平次列臨機之取計種々ニ相働荷物等無恙小倉表江相届候、右舟積之儀、通し夫運送之積ニ〆千四百人程之荷物右夫方往返飯米代渡被仰付候得者千両程ニ相成可申処、舟運送并陸地人馬賃銭才料御家人雑費共一切三百両程ニ而相済一ト稜之処ニ〆七百両程之御出方減シ申候由、夫のミならす右之通、通シ夫被召仕候ハ、在中困窮者不及申並壱人百八拾目宛之雇銭ニ積立候得者弐千五百両余ト在中出銭相省キ上下之間ニ都合三千弐百両程者全ク出方相減候由是又安太工夫を凝し候故と存候事、

（三六）同

（三七）「覚」（「覚帳」文七―三―十一・熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵）。

一御荷物八百五拾箇余　斤数三万七千四百斤

夫積ニ〆千弐百人　但壱人五貫目持之積

一同九拾箇人余

斤数壱万弐千五拾斤余

夫積半途迄ニ〆百九拾七人

但右同瀬の下より積返被仰付候分

〆夫千三百九拾七人

此飯米九拾貫六百六拾五匁三分

但小倉迄往懸六宿之内二宿者

御国内弐百八拾文宛旅中四宿壱米
宛帰り懸五宿之内旅中三宿
御国中二宿、右同断ニ〆夫壱人前
六拾四匁九分宛ニ〆本行之通可被為拝領分、
一銭弐百五拾壱貫四百六拾目
但在夫賃銭此節通夫壱人百八拾目之規矩ニ
〆
合三百四拾弐貫百弐拾五匁余
内三拾貫拾五匁余
但右荷物舟積一切之雑用
差引　三百拾弐貫百目余　但此分御上下之失費
全相減申候事

(三八)『覚』(『覚帳』文七―三―十一―(熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵)。
…九月廿九日より下ノ関江忍渡長州清末町と往返仕、彼方之事情一ト通探索仕候段者別紙覚書御達申上置候通ニ御座候、此一条ニ至候而者彼表関門出入り等之儀、一立之誤より一身之浮沈難量有之候処、茂平次儀誠心差者満り元来膽力茂有之候処より無事ニ相凌、稜々探索仕罷帰候儀ニ而、於此儀者抜群之志と奉存候…

(三九)「元治元年尊攘録探索書」(改訂『肥後藩國事史料』巻五　三〇九頁)。
「元治元年九月廿五日、本藩安田源之丞広島に於て偵察せし征長事件に関する聞取書を提出す」などがある。

(四〇)『三兵答古知幾』の活用もその一つである。同書はプロイセンの参謀本部付将校ハインリッヒ・ブラントの三兵戦術書をオランダの陸軍士官学校教官ファン・ミュルンが蘭語訳し、さらに弘化四年(一八四七)、高野長英が邦訳したもの。

※本論攷の成稿にあたっては、松崎範子氏より助言と共に、史料『国作手永大庄屋日記』をご提供いただいた。ここに謝意を表する次第である。